14　岡山県邑久郡中島家資料にみる蘭学関係書について

酒井　シヅ[1)]，中島　洋一[2)]

[1)]順天堂大学医学部医史学研究室，[2)]医療法人洋友会 中島病院

表題の中島家は正徳5年（1715）から現代まで10代続く岡山県邑久郡（現瀬戸市）の医家である．中島家資料については，本学会でこれまで中島洋一らによって報告が行われてきた．また蔵書については第113回日本医史学会学術総会において，清水信子がその概要を報告した．今回は蔵書のなかの蘭学関係書をとりあげ，それらが何時，誰によって入手されたものかを調査した結果を報告する．

中島家の蔵書は江戸初期から明治にいたる間のもので，歴代の当主が勉学あるいは趣味のために入手し，子孫に伝えたもので，いわゆる蔵書家が古本を蒐集したものでない．従って，蔵書を分析することは，中島家代々の医家の形成，および文化人としての特色を知る一助となる．

なお，今回の調査の底本としたのは2006年の「江戸のモノづくり」で調査報告した『岡山県邑久郡中島家資料調査報告書』の「中島家資料目録（2）書籍目録」である．蔵書目録に採録された書籍数は556点である．そのうち蘭学，洋学関係医書の数は77点（刊本が32点，写本が45点）である．

写本には『紅毛流紀陽吉雄献作先生膏薬・油薬・水薬方書』『紅毛流吉雄伝水薬方』『巻木綿図解』『吉雄先生聞書』吉雄如潤『油斯児抜翆（粋）救溺論』『阿蘭陀外科目録』『吉雄流金瘡外科口伝』吉雄権之助『布劍己梅毒薬剤編』吉雄献作訳・出羽庄内山口行齊筆録『布劍己梅毒論』である．いずれも明らかに長崎の吉雄塾で入手したものである．「中島家系譜」によると，長崎に遊学した者は3代目宗仙で，文政二年（1819）に遊学している．宗仙の系譜は以下の通りである，

「名は仙讃，字は子述，幼名恵吉，十六歳にて父玄古を喪い，兄貞侃医業を続きたる間，西大寺河野意仙に従い医を学の間，兄貞侃死して止むことを得ず家に帰り，役介人武良と同居して開業せしに，素より家貧しく業も不行ば日々衰微の趣，この時廿四歳也，寛政十二申年岡山御医者木畑貞朴の譜代弟子願をいたし，同年より翌享和元酉年迄廿七歳・廿八歳の間京師に遊学して吉益周介南涯先生に随て古方を学び，その外産科・外科へ入門して医術を修業し，帰国して業盛んに行われ，上京中雑費並びに古借財等早速に償しよし聞伝り．三十一歳にて妻を娶り，三十六歳にて文化六年巳九月，御上より姓御免を賜り，四十六歳，文政二卯年肥前長崎に遊学す．夫より業大に行われ、其後御上より御目見医者仰付られども硬く辞して肯かず，凶年などには村民は勿論他村の貧民へ米麦或いは金子を以て救いたる事度々あり，文政八酉年，四国順拝す．歳六十七にて病死す」

刊本の蘭書には，『解体新書』安永3年（1774）『医範堤綱』文化3年（1805）『増補重訂内科撰要』文政2年（1822）『新訂増補和蘭薬鏡』天保1（1830）と高名な蘭医書（刊本）が並ぶ．その他安政年間以降のものが多い．4代友玄（1808–1876）の時代である．

「中島家系譜」の友玄の履歴は以下の通りである．

「名は玄也，字は又玄，幼名は八百吉，後に金吾と変名す．父に従い医を学び，廿三歳文政十三年寅年，岡山池田信濃守様御医者武井養貞に願込み，譜代弟子となる．廿六歳天保四巳年，京師に遊学して，吉益周介北洲先生に随い，古医方を学ぶ，小石元瑞並びに藤林泰祐に入門して西洋医方を学ぶ．また奥道辺の門人緒方順節並びに清水大学に随ひ産術を学び，高階清介とて華岡の門人あり，随って外科を学び，三十八歳弘化二年巳三月二五日，苗字を御免となされ，又四十六歳嘉永六年丑五月十八日，御目見医者に拝せらる」

以上から中島家蔵の当該の書は中島家3代目宗仙と4代目友玄によって入手されたものといえる．

本研究は文科省科研費助成・基礎研究（C）「江戸時代における地域医療研究―岡山県邑久郡の中島家をもとに―（研究代表者：松村紀明，課題番号23501206）による研究成果の一部である．